

馬栓棒と社会の窓

神村ふじを

長らく教育に携わってきたので、子どもたちの様子が目がいってしまふ。退職してから近くの小学校に読み聞かせボランティアに行っているのも、子どもたちに関わっていたい、どこか気になる、そんな気持ちがあきつとあるのだろう。この気質といつか性分というのかよく分からないが、いつからこんなふうになったんだろうと反省しつつ、いそいそと読み聞かせに出掛けていく自分がある。

最近の子どもたちの様子と自分の育った頃の時代とついつい比べてしまうことがよくある。物質的な豊かさは比べものにならない。特に感じるのは子どもたちの普段の服装である。

子どもたちの服装はずい分変わった。みんな同じようなものを着ている。好きなTV番組の一つにNHKの「鶴瓶の家族に乾杯」がある。それを見ると、全国津々浦々、普段着の小学生たちが時折出てくるが、山形の子も北海道の子も鹿児島の子も本当に変わりが無い。全国的に同じなのである。個性がないと言ったらそれまでだが、今の子どもたちの服装のお洒落さ加減と言ったら、

自分の子ども時代とは雲泥の差である。お洒落のおの字もなく育ったから、ファッションなどにはとんと無頓着である。

全国展開を図る衣料量販店の存在、物流の進展、経済効果目覚ましく、着ているものを見る限り地域性などまるでない。日本は単一民族の国家だとよく言われる。顔立ちだってそんなに違わない。奄美、沖縄の人たちは何となく彫りが深く海を感じさせると思っていたが、十人十色で、TVで見ると、彫りの浅い顔だつて結構いる。

ただ、話し言葉に表れる方言、イントネーションの中にその地方独特の言い回しがあり、そこに地域性を感じることがある。

地域格差、地方格差は、見る限りにおいては、そんなに感じられなくなった。高度経済成長の名の下、日本は押し並べて標準化、平準化の道をひたすら歩んできたように感じる。

最近、経済格差、貧困の問題がよく取り上げられているが、標準化、平準化の裏に隠れた目に見えない部分が顕在化してきたということのように映る。

ところで、私の子ども頃のズボンに付いているそれは、チャック（ファスナー）ではなくてボタンだった。股のところに切り込みがあり、縦に二つか三つボタンが付いていた。

その当時、それをなぜか「マシエボ」と呼び、「お前な（の）マシエボあいつだ（開いてるよ）」面白半分て友だちをからかうと、例外なく股のところに手をやったものだった。このマシエボのこ

とを上品に言えば、(こと股間に関わっては上品も下品もないと思うが……)「社会の窓」のことである。

股ボタンがチャックやファスナーに代わっていくとともに、いつの間にか不潔そうでだらしのないマシエボはあまり見かけなくなったが、「社会の窓」という言葉だけは生き続け、今でも通用している。が、密閉タイプのファスナーといくばくかの光明のある股ボタンでは決定的に違っていたのだが……。

このマシエボは江口文四郎氏によると、「馬栓棒」のことだと言う。

「ましえ棒」ということばがある。漢字で書けば「馬栓棒」となり、どこにも通ずることばらしいが、村では「ましえぼう」と発音している。畜舎(かつてはおおかた母屋の一部だったが)の入口に取り付けられる頑丈な棒のことである。(中略)等間隔に一列に並んだ股ボタンは、ましえ棒に酷似している。

江口文四郎著*『新村のことば』(昭和五十五年、やまがた散歩社刊)

牛馬といっしょに住んでいた頃、逃げられないように馬屋の入口に棒を掛けた。つまりこの馬栓棒はやんちゃな牛馬と社会を隔絶するために仕掛けられた唯一の棒なのであった。

私はと言うと、確認しながらマシエボを閉める。やんちゃな息子を押しとどめるためにマシエボを閉める。やんちゃな息子の覗き見る窓は暗くて寒い。明るい外へ出たがる息子。その窓をみんなは「社会の窓」と呼んだのであった。

*江口文四郎は、一九二八(昭和三)年、山形市郊外の村木沢村生まれ。山形師範を卒業後、山形市周辺の小・中学校で教鞭を執った。「山形文学」同人。一九八八年没。

(追記)

「社会の窓」について次のようなことが分かった。一九四八(昭和二十三)年からNHKが社会の内情を暴き出すという内容の「社会の窓」というラジオ番組を放送した。この番組名が大事なものが隠された場所という意味で社会的に使われるようになったらしい。「社会の窓」は今でも通用する言葉として市民権を得ている。そう考えると、ラジオの番組名が社会に与えた影響の大きさを感ぜずにはいられない。